

近藤洋君のこと

(洋君は研究室に来てすぐに、交通事故で夭折しました。彼との短いふれあいの記録です)

高部英明

近藤洋君は平成 5 年 3 月、大阪大学工学部材料開発学科を卒業し、同年 4 月、大阪大学大学院工学研究科電磁エネルギー工学専攻博士課程に入学しました。大学院では私達のレーザー核融合研究センター（略称レーザー研）にて理論研究を行うこととなりました。

昨年 4 月 12 日、私の「電磁流体力学」講義のあとで教壇に近づき、「先生、レーザー研での理論研究の内容について聞かせて下さい」と真摯な態度で接してきたのが彼との初めての出会いでした。そのあと、友人 4 人をともない私の部屋を訪れ、理論研究ではどんなテーマを扱うのか、研究への姿勢、などについて質問し、私の方から説明をしました。研究室希望で、ぜひ理論をやりたいと申し、中井センター長にも「理論をやらしていただけるでしょうね」とせまったと聞いています。近藤君の大学院での研究にかける情熱がうかがえるかと思います。

私のグループ（TSセクション）に所属してからは、本人の希望もあり原子物理学関係の研究をしてもらうことに決まり、関連した勉強を始めていました。折良くレーザー研の外国客員教授として滞在中であった、Salzmann 教授（イスラエル、ソレク研究所）の論文読みから始めました。5 月 25 日、その論文の解説をしてもらう予定になっていた彼は、帰らぬ人となったのです。

研究室に来てわずか 1 ヶ月余り。大学院での研究にあれほど積極的であった近藤君が不帰の人となったことは、大変惜しまれてなりません。彼が論文解説のために用意したレジメが遺稿となりました。それを見るにつけ、内容理解の深さ、熱心さ、丁寧に書かれた字と、大変惜しい人材を失ったことを再確認させられました。

Salzmann 教授の講義にも毎週熱心に出席していました。英語での講義に最初はとまどいを感じているよう様子でした。しかし、教授と一緒にお昼に出かけては、これからの研究のこと、日本文化のことなど不慣れな英語ではあっても気後れすることなく、積極的に話していたのが印象的でした。Salzmann 教授も「近藤はいい性格のすばらしい人間だった」と彼の死を心から嘆いていました。

葬儀に際しては、応援団の友人達の話の色々と聞きました。近藤君が皆から愛され、下級生からは信頼され、慕われていたことがうかがわれました。私自身大学時代にクラブに所属せず、彼の友人の話聞くにつけ「クラブを通してこんなにすばらしい人間関係を築いていた近藤君がうらやましい」と感じた次第です。

近藤君が研究室に来てわずか 6 週間。これからの研究にあれほど希望をいただき、情熱を傾け、自分の未知なる才能に挑戦しようとしていた近藤君が、あまりにも早く逝ってしまったことは、まことに残念であり、レーザー研にとって大いなる損失でありました。近藤君と最初に会った時の「先生、研究の話聞かせて下さい」といった真摯な眼差しが私の脳裏に焼き付いて離れません。あまりにも早く逝ってしまった近藤君。残念でなりません。